

J E Tプログラム25周年記念シンポジウム ～出席者からの評価など～

川端総務大臣

JETプログラムは今や世界最大規模の国際交流事業へと成長して国内外で高い評価を得ている。

JETプログラム参加者は、各地域にて、外国語教育の場で子どもたちがネイティブの言語に触れる貴重な機会を提供している。また、地域に根ざした活動が地域住民の国際理解や国際感覚の増進に寄与してきた。帰国後には日本の理解者として母国と日本の友好交流の橋渡し役として活躍している。

シンポジウムを契機に世界中で活躍するJET卒業生などの交流ネットワークが広がっていくことを祈念する。



玄葉外務大臣

JETプログラムは、地域に根ざした国際交流、相互理解を通じ、文化を含む日本の価値を対外的に発信していく重要なツール。

日本のグローバルな人材の育成の面でも有効なツール。世界が日本の復興に注目している中、日本人の価値を改めて発信していくために、日本と出身国の架け橋のJET参加者・卒業生の存在は心強い。

中川文部科学大臣

JETプログラムは、グローバル化の中で、日本が外に向かって発信をしていく取組の出発点であり、また、逆JETという形で日本からも海外に出ていくようなプロジェクトも必要ではないか。

ジョン・ルース
駐日米国大使



JETプログラムは歴史の中で最も成功した、最も先見の明のある交流プログラムである。JET参加者は常に日本にとっての大使、PRマンとなっており、日本との強い絆を今でも保っている。JETプログラムは英語習得のみならず、国際的理解や国境を越えた人と人のつながりを築く、グローバル化した世界でかけがえのないものである。

米国大使・英国大使 韓国公使よりの評価



デービット・ウォレン
駐日英国大使



JETプログラムを通じて、日英両国の若者が緊密に接することで、互いの社会や文化の違いを乗り越えて相互理解を推進している。また、JETの貢献として、ますます国際ビジネス分野における言語になりつつある英語教育分野も重要。

イ・ギョンス
駐日韓国公使



両国の国民一人一人が、草の根レベルでの交流を通じて、絆を育んでいくことが外交関係の基礎であり、JETは草の根レベルの外交窓口として国民の心をつなぐ大切な架け橋である。

ジェームス・ギャノン
米国法人日本国際交流セ
ンター事務局長



JETプログラムは、世界で最も大きな成功を収めている民間外交プログラムで、世界各国の次世代のリーダーを育成しており、国際関係において重要となるソフトパワーの勝利とも言える。

JETプログラムの次の25年間はさらに素晴らしいものになると確信している。

アンガス・ロッキヤー
ロンドン大学アジアアフリカ
学院日本研究所長

私が勤務した20年前では、JETプログラムの目標と、大学入試を目的とした日本の英語教育の目標との間にミスマッチがあった。

ただ私自身JETプログラムへの参加はその後の人生を方向づけるすばらしい機会となった。授業外のサマーキャンプや部活、留学旅行など授業以外の場においても、生徒たちへの英語教育やふれあいの機会を得ることができた。

<アンガス所長の教え子の話>
外国人を見る機会がほとんどなかった当時、ALTを通じて、ネイティブの英語に触れる機会を得られたこと、で、英語をさらに学びたいという意欲が湧き、有益な機会であった。

キム・ジンア
韓国全国市道知事協議会国際協力部長

CIRとして日本で働く中で、母国韓国の文化を強く認識し、ご自身のアイデンティティーに関して深く考える機会となった。

JETプログラム参加を通じて、日本の文化を尊重して、母国の文化についても誇りを持つといった、文化に関するバランス感覚を持つこととなることが、JETプログラムの重要な価値である。



パネルディスカッション 「JETプログラムの25年と将来展望」

コーディネーター: 中邨章 明治大学名誉教授

パネリスト: 山田啓二 京都府知事

新里眞男 東京国際大学教授

アンガス・ロッキヤー 所長

キム・ジンア 部長

木村陽子 財団法人自治体国際化協会理事長



1. JETプログラムが果たしてきた役割

- ◆ 非常に厳しい財政状況の中で、25年間続いてきたことがJETプログラムの効果の端的な証明(山田知事)
- ◆ この25年間で、英語教師の英語力、生徒の英語を話す能力などは大きく上がっている(新里教授)
- ◆ 国際交流の面では大成功。英語教育の面でも、日本の教育が多様化していると聞く(ロッキヤー所長)
- ◆ 地域レベルの草の根の交流は継続的に盛んに行われており、その架け橋がJETの国際交流員(CIR)(キム部長)

2. OBネットワークの重要性

- ◆ 母国に帰ったJETのつながりとなる同窓会のようなネットワークを制度化してはどうか(中邨名誉教授)
- ◆ JETプログラム卒業生たちの組織づくりは重要。フェイスブック等のツールを活用して、地域を単位とした組織づくりが一番効果的ではないか(山田知事)
- ◆ 韓国ではインターネット上で交流の場がシステムの的に運営されていて、JETの卒業生、クレアソウル事務所、韓国にある日本大使館と交流している(キム部長)
- ◆ JETに教わった生徒たちも含めて、都道府県単位のOB会をつくれれば、素晴らしいと思う(木村理事長)



3. 今後のJETプログラムへの期待

- ◆ JETは学校のイベントでも、地域の中でも国際交流を行っており、そうした実際のコミュニケーションがあるのがJETの良い点(新里教授)
- ◆ JETを受け入れる自治体の側で、目的意識をもって、どのように戦略立てて、JETを活用していくかといったことが重要(キム部長)

閉会挨拶



山田啓二 (財)自治体国際化協会会長・京都府知事

JETが25年を迎え、このプログラムを継続し、変わることなく国際交流、教育の分野で活躍して頂いてきたこと、これを支えていただいたすべての皆様に感謝する。

JETはこの25年間で、我々の大きな財産となっている。外務省、総務省、文科省が後援をして、そして地方公共団体が出資をしている自治体国際化協会が関わり、各国の大使館において試験をやり、そしてさらに教育委員会をはじめとして、みんな連絡しているこのプログラムが成り立っている。この財産をしっかりと意識して、さらに磨くことができるならば、JETの未来というものは、すばらしいものになる。

このシンポジウムは、JETの原点を考え、さらに発展させる大きな機会になったと思う。

地方公共団体は今後もJETプログラムをしっかりと支援していくので、関係の皆様も引き続き、日本の教育、国際交流のためにお力添えをいただくことをお願いします。